

兵庫県西宮市でシンジュキノカワガの幼虫を採集・羽化の観察

石川 佳史¹⁾

はじめに

シンジュキノカワガ *Eligma narcissus* は中国原産の偶産種で、本誌「きべりはむし」でも過去に兵庫県内の記録が数回報告されている（安達, 2010；池田・阪上, 2016；久保, 2016；高橋, 2016）。筆者は西宮市の甲山で幼虫を採集し、羽化までの経過を観察したのでここに報告する。

幼虫の採集

2016年9月22日に西宮市にある甲山広河原のニワウルシで幼虫7匹を採集し、観察をした。ニワウルシの木は約10mの高さで、周辺には他には見当たらず、高さ7mあたりの葉はほぼ食べつくされていた。今回採集した幼虫は高さ2mあたりの葉を集団で食べていた（写真1, 2）。

蛹化

幼虫はすでに終齢幼虫だったようで、次の日に1匹がプラスチックケースの天井面に繭を作り始めた。通常はニワウルシの幹で、皮をかみ砕いて繭の周りにつけることで、木肌にカムフラージュした繭を作るらしいが、木がないので糸だけで繭を作りあげた。次の日に桜の木の枝をいれておいたところ、残りの幼虫が繭を作り始め

た（写真3）。数匹が近い位置に繭を作ろうとしたところ、先に作り始めた幼虫がさかんに首を振り、後から繭を作り始めた幼虫を振り落としてしまった。後で見ると、振り落とされた幼虫はケースの底で、糸の繭もなしに裸の状態で蛹になっていた。蛹化後11日目の10月6日に、蛹を刺激すると音を発するようになった。後に確認したところ、繭の裏面にギザギザがあり、蛹の殻をこすり合わせて発音していることがわかった（写真4）。

羽化

蛹化後16日目の10月11日に2頭が羽化し、そのエキゾチックな姿を現した（写真5）。大変おとなしく、少し触ると、お腹を曲げて死んだふりをした（写真6）。その後も観察を続けたが、ついに他の蛹が羽化することはなかった。残った蛹のうち2つを分解してみると、1つは乾燥して干からびており、もう1つは寄生バエと思われる蛹が十数個詰まっており、元の蛹の中身はなくなっていた。

おわりに

その後、幼虫を採集したニワウルシの木をくまなく調査したが、繭の跡を確認できなかった。本種は日本では越冬できないと考えられているので継続して発生する



写真1 幼虫を採集したニワウルシ。



写真2 シンジュキノカワガの幼虫。

¹⁾ Yoshifumi ISHIKAWA 兵庫県西宮市



写真3 サクラの枝に繭を紡ぐ.



写真4 繭の内側の発音部分.



写真5 羽化直後の成虫.



写真6 刺激による擬死.

かどうかは不明である。しかし越冬と定着が示唆される報告（高橋, 2016）もあるので、今後も調査を続けたい。

参考文献

- 安達誠文, 2010. 伊丹市昆陽池で発生したシンジュキノカワガ. きべりはむし, 32(2): 7-8.
- 池田大・阪上洗多, 2016. 播磨地方西部におけるシンジュキノカワガの記録. きべりはむし, 38(2): 49.
- 久保弘幸, 2016. 兵庫県市川町でシンジュキノカワガを採集. きべりはむし, 38(2): 50.
- 高橋輝男, 2016. 二年連続して兵庫県市川町でシンジュキノカワガを観察・採集. きべりはむし, 39(1): 22-23.